

1. 評価結果概要表

作成日 平成 21年10月30日

【評価実施概要】

事業所番号	0173100314		
法人名	社会福祉法人じねん		
事業所名	グループホーム寿楽		
所在地	〒078-1304 上川郡当麻町4条西2丁目1番10号 (電話) 0166-84-5546		
評価機関名	社会福祉協議会北海道社会福祉協議会		
所在地	札幌市中央区北2条西7丁目		
訪問調査日	平成21年10月6日	評価確定日	平成21年10月30日

【情報提供票より】(平成21年9月1日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成 16年 2月 1日		
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計	18 人
職員数	19 人	常勤 7人, 非常勤 12人,	常勤換算9.8人

(2) 建物概要

建物構造	木造平屋 造り	
	1階建ての	1階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	23,000 円	その他の経費(月額)	21,000~29,000 円	
敷金	有() 無()			
保証金の有無(入居一時金含む)	有() 無()	有りの場合償却の有無	有 / 無	
食材料費	朝食	400 円	昼食	400 円
	夕食	400 円	おやつ	円
	または1日当たり 円			

(4) 利用者の概要(9月 1日現在)

利用者人数	18 名	男性	6 名	女性	12 名
要介護1	4 名	要介護2	1 名		
要介護3	4 名	要介護4	9 名		
要介護5	0 名	要支援2	0 名		
年齢	平均 84.8 歳	最低	74 歳	最高	95 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	当麻町立診療所・当麻歯科診療所・他
---------	-------------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

当事業所は、当麻町からの要請を受け、土地改良区の建物を改修し、法人内2番目の事業所として平成16年に設立した。町役場、消防署、スポーツセンターなどが徒歩圏内にあり、日常的に連携、協力が得られる環境にある。開設当初から地域に根ざした事業所として、住民との近所つきあいを大切に、相互交流を試みている。「ゆっくり、いっしょに、楽しく」をモットーに、利用者一人ひとりの思いを受け止め寄り添うケアに努めている。利用者は、田園風景の中で自然との触れ合いを通して四季を感じながら生活している。

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	前回調査で検討中であった重度化や終末期に向けた取り組みは、どのように取り組むか検討中であり指針を作成するまでには至っていないが、職員には事前研修を進めている。
重点項目②	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	自己評価は職員一人ひとりが自己のケアを振り返りながら検討し、理事長、管理者、職員全員で話し合い、管理者が取りまとめている。また、職員は第三者の目線を気づきの機会と認識し、外部評価の結果もサービスに活かすよう心がけている。
重点項目③	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)
	今年度から、2ヶ月ごとに運営推進会議を開催している。町健康福祉課職員、地域包括支援センター職員、民生委員、利用者家族代表、管理者等で事業所の運営状況、行事案内及び協力要請などを話し合い、家族などから会議において出された要望や意見もサービスに活かすよう努めている。
重点項目④	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)
	利用者の暮らしぶりは、主に家族の来訪時に伝えている。行事案内、報告等は年3回の便りを活用し、意見や苦情の窓口を事業所内に掲示するなど、言い易い雰囲気づくりに努めている。
重点項目④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	事業所設立時の経緯から町からの協力的な支援の下、地域住民の理解も得られ、日常的に交流がある。利用者は地域の行事や催事に参加し、事業所の行事にも多くの住民やボランティアが参加し交流が深まっている。幼稚園児の訪問、中学生の体験学習などを受け入れている。さらに、職員が認知症のキャラバンメイトとしての取り組みも進めつつある。

2. 評価結果（詳細）

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念の共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	法人設立時から「①のびのび、にこにこ、暖かく ②ゆっくり、いっしょに、楽しく ③長寿喜樂、敬老奉仕」の理念の下、パンフレットに「地域に根をおろした開かれたグループホームを目指す」と記し、地域と共にという目標を掲げている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	毎日のミーティング時や会議において職員全体で理念を唱和し、日々のケアにおける理念を確認し、話し合っている。また、ケアプラン作成時にも理念を念頭に取り組んでいる。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	事業所は、町の祭り、蕎麦祭り、敬老会等へ参加すると共に事業所が主催する納涼祭、クリスマス会等に地域住民を招待している。また、近隣農家から野菜等の提供も多くあるなど、地域住民と日常的に触れ合う機会がある。さらに、幼稚園児の訪問や中学生の体験学習も受け入れている。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	日々のケアの振返りの機会として、職員一人ひとりが自己評価に取り組み、全体で話し合い確認している。職員は、第三者の目線の重要性を認識し、外部評価を気づきの機会ととらえ、ケアに活かすよう取り組んでいる。また、評価結果を家族や運営推進会議にも提示している。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度から2ヶ月ごとに町福祉課職員、地域包括支援センター職員、民生委員、家族会2名、事業所職員等で運営推進会議を開催している。事業所及び利用者の現況、行事案内、報告、イベントへの協力依頼などを伝え、家族会からの意見なども話し合っている。出された意見は職員全体で検討し、サービスに活かしている。		
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	事業所が町の要請の下設立された経緯があり、また、役場が徒歩圏内にあるので、日常的に行き来でき、利用者の様々な手続きや相談が円滑に進む環境にある。町職員が事業所のイベントに参加したり、管理者が町の高齢者福祉関連委員会の委員として町の福祉の向上に貢献している。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	家族の来訪が多く、その時に本人の状況を説明している。医療機関への受診時や健康面で変化のあった時には個々に報告を行っている。年3回の便り、家族会の総会、運営推進会議等でも利用者の暮らしぶりを家族に報告している。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族が来訪時に話しやすい雰囲気作りに心がけている。家族会の総会時や家族が参加するイベント時にも家族からの意見を聴くと共に、事業所内の見やすい場所に内部、外部の苦情及び相談窓口を表示しているが、重要事項説明書には書かれていない。	○	重要事項説明書など家族が手元においている書面の中に、事業所の窓口を含め外部の苦情及び相談窓口を複数提示するよう期待したい。
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	職員の異動は少なく、法人内での異動となっている。法人内の事業所と日常的に行き来しており、利用者も職員も顔なじみの関係の中で異動を行っており、利用者の混乱はほとんどない。職員が異動する際には、利用者が集まりやすい時間帯に伝えている。職員が代わる場合は、利用者一人ひとりの状況を伝え、利用者の不安を防ぐよう配慮している。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設長が管内のグループホーム協議会の役員という立場から研修の情報が入りやすく、管内の様々な学習会に参加している。受講した職員は、それを月1回のミーティング時に発表し、全体で学ぶ機会としている。また、日々の実践の中で体験を通して学ぶ機会も多くなってきている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	施設長は、同業者と接する機会が多く、機会有るごとに学習会や交流を行っている。事業所のイベントに同業者を招待したり、職員同士が相互訪問をし共に学びながらケアに活かす取り組みをしている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入院中から利用される人が多いが、事前に本人、家族と面談し、事業所を見学、または利用体験を通して、納得しながら利用している。利用者の自宅を訪問することもあり、家族との関係や本人の生活状況を把握し、家族と相談しながらなじめるよう工夫している。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	利用者一人ひとりの生活歴や得意なことを把握し、朝の清掃などの役割をもってもらい職員と一緒にいたりしている。調理や裁縫などの技術や知識を利用者から教わることも多く、支えあう関係が出来ている。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりの思いを大切にして、利用者中心の暮らしを支援している。職員は、日々の暮らしの中で本人がどのように暮らしたいのか、思いや意向について関心を持ち、意向の表出が困難な場合は、しぐさや表情から把握するよう努め、家族からの情報も得ながら検討している。		
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	日々の記録や、申し送り、ミーティング、カンファレンスで検討を行い、看護師や医師の助言やアドバイス、家族の意向を反映した介護計画を作成している。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	介護計画については、短期3ヶ月、長期6ヶ月の見直し期間を設定している。定期見直しはもとより、記録モニタリングを利用者の実情に合わせたスパンで実施し、計画、日々の記録、記録モニタリングが一目で確認できる方式により、現状に即した計画の見直しが行える仕組みを整えている。		
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	本人の希望や状況に応じた個別外出支援を積極的に行い、桜や藤棚見物等の外出では、事業所の車を活用し家族を交えて楽しんでいる。医療連携体制を整え、日常的な受診には職員が付き添っている。利用者希望による買い物や自宅への訪問支援も行い、また、事業所は町民の高齢者相談も受けるなど、多機能性を活かした支援を行っている。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者は、月1回の町立診療所からの往診と訪問リハビリを受けている。利用者一人ひとりの定期通院には、事業所の看護師が中心となって対応し、かかりつけ医と連携し受診状況を家族に報告しながら支援している。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	事業所は、利用者の高齢化が進んでおり、重度化や終末期の対応の検討時期と考えている。重度化に向けた対応方針はあるが、段階的な対応指針は示されていない。医療連携体制の下、どのような対応が可能か、職員の事前研修を徐々に進めてきている段階であり、職員も対応指針の必要性を認識している。	○	介護実践の中で終末期を迎えた利用者もあり、関係者間での合意が適切に進められるよう重度化や終末期の対応指針の提示が求められる。医療連携体制の下、医師、看護師、職員と共に検討を図り、対応指針を示し家族、本人他関係者全体で段階的に話し合えるよう期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	利用者のプライドに配慮した言葉かけを行っている。また、トイレのドアは居間や通路に面しない構造とするなど、排泄時のプライバシーに配慮している。個人情報の記録などは外部から見えにくい書棚に保管し、職員間の業務メールも禁止するなど、取り扱いに留意している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者のその日の体調把握、体操、リハビリを兼ねた清掃など事業所としての基本的な流れはあるが、一人ひとりのペースに合わせ、自由に過ごせるよう支援している。利用者は、昼食後の午睡、裁縫、友人と居室で談笑など、思い思いに過ごしている。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一人ひとりの能力に応じて、味付けや調理、後片付けに参加している。来訪した家族なども加わり、楽しい会話のある食卓となっている。時には庭先の東屋で焼肉パーティーや外食、出前なども行い、食事が楽しみとなるよう支援している。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	本人の体調や希望に沿って、いつでも入浴できる体制にある。また、夏期間や外出の後など、利用者の状況に応じて、シャワー浴も行っている。少なくとも週2回は入浴するよう支援している。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	一人ひとりの趣味や生活歴から好みや得意ごとを把握し、野菜作り、花畑の草取り、水やりなどの役割を設けている。朝の掃除は生活リハビリを兼ね職員と一緒に行き、針仕事の得意な利用者は、繕い物の手伝いなどが張り合いとなっている。また、カラオケや張り紙工作なども楽しんでいる。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	地域の行事や催事には積極的に参加を試み、その日の希望や天候を見て、ドライブや紅葉見物、系列のグループホーム訪問など日常的に戸外へ出かける機会を多くしている。個々の希望に沿って、買い物や散歩の支援も行っている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	日中は鍵をかけず、防犯上から夜間のみ施錠している。外出を希望する利用者には、本人の意思に沿って見守りながら自由に過ごせるよう配慮している。		

外部評価	自己評価	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取り組みを期待したい項目)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	昼夜を想定、特に夜間帯に近くにある消防署と連携して年2回避難訓練を行っている。事業所前のコンビニエンスストアを避難場所として確保し、災害時の地域住民への協力依頼も行っているが、災害に備えた備品等の整備には至っていない。	○	火災や地震等災害時に備え、非常用食料、備品等の整備を行い、安全、安心の確保につなげるよう期待したい。
(5) その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者一人ひとりの食事の摂取量、及び水分量を把握し記録している。食が進まない人には食材の形を変えたり、休憩をいれて気分転換を図って摂取量を確保するなど工夫している。また、栄養士に定期的に献立をチェックしてもらうなど、栄養バランスの指導を受けている。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1) 居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	既存の建物を改修しているが、全体的にゆったりとした空間があり、車椅子や歩行器の利用にも支障がない。増築した1ユニットの居間の高い天井には、採光窓が連なり明るい雰囲気となっている。廊下には季節感を採り入れた手作りの装飾作品を飾り、また、ソファを置くなど思い思いの場所で過ごせるよう工夫している。広い空間を利用して、昔懐かしいダンスや大きな長持なども違和感無く置いている。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	小さな洗面台と収納場所がある居室には、なじみの家具やテレビ、仏壇など思い思いの調度品や家族写真があり、利用者それぞれが居心地よく過ごしている。訪れた友人と過ごしている利用者もいる。		

※  は、重点項目。